

イタリア研修記

若林健二郎

平成16年1月から2カ月間、イタリアのレッコという町にある OSPEDALE A MANZONI という病院でイリザロフ法の研修をさせて頂きました。レッコという町はミラノから電車で1時間くらいの場所で、コモ湖というとてもきれいな湖のそばにあります。スイスとの国境も近く、町からはアルプスの山並みも見えますのですが、冬の冷え込みは思った程ひどくなく、滞在中に1回しか雪は降りませんでした。この町は夏はイタリア人達の避暑地としてにぎあう様ですが、滞在中は冬でしたので観光客はほとんどいなく、まして日本人と出会う事は全くありませんでした。

イタリア人は基本的に英語を話せない人が多く（病院の医師は英語が話せるのですがそれ以外のスタッフは全く英語が通じません）町中でも病院でもほとんどイタリア語なのでコミュニケーションに大変苦労しました。イタリアの食事はなんでもうまいと言う話を聞いていたのですが、それは主に観光地での話で、田舎町での大衆食堂では茹ですぎの Pasta が出てきたり、貝の中に砂とドロが入っていたりと必ずしも美味しいものばかりではありませんでした。まして、すべてイタリア語で対応しなければならないので、基本的に毎日バーやカフェでパンかサンドイッチばかり食べていました（そのためか帰国時には体重が5kg減ってました）。イタリア人にとってバーは欠かせないものです。毎朝出勤前にバーでカフェ（イタリア人にとってカフェはエスプレッソを意味します）を飲み、日中もちょくちょくバーに立ち寄り、帰宅前に同じバーでワインを飲んで馴染み客と語らうという人達をよく見かけました。僕もアパートのそばのバーに毎日通いマスターとボディーランゲージでの会話を楽しみました。

イタリアは盗難がとても多いと聞いていた

ので十分に注意していたつもりですが一回だけ被害にあってしまいました。病院が土日休みなので毎週末電車でイタリアの観光地を巡っていたのですが、ローマに行った時にぼったくりバーにつれこまれて、ビール2杯飲んだだけで5万円近くとられてしまいました。イタリアの観光地を歩いていると色々なイタリア人が声をかけてきます。そのほとんどが窃盗目的だと思われ、特に日本人を狙っている様です。ぼったくりの被害にあってからヒゲをのばすようにしたのですが、その後は声をかけてくるイタリア人が激減したのでヒゲは防犯効果があると思われまます。みなさんもイタリアに行く時はヒゲをたくわえてから行きましょう。

病院での研修は週3日の手術と週2日の外来を朝から午後3時頃まで行ない、それが終わるとみんな「チャオッ」と言って帰ってしまいます。手術も3時を過ぎると麻酔科が帰ってしまうので、その後の予定手術が残っていても翌日にやるという具合です。ある朝、手術日なので手術室に入ったらみんながイタリア語で大騒ぎしていました。何ごとかと聞いたら、急に麻酔科の医師がストライキを起こして今日の手術ができないと言うのです。イタリアはストで有名だけどまさか麻酔科のストがあるとはびっくりでした。

OSPEDALE A MANZONI という病院は800床くらいの総合病院で整形外科の医師は8人、その内4人が通常の整形外科の業務をこなし、カターニ教授を中心とした4人はイリザロフのみを行なっていました。カターニ先生のイリザロフ法は CORA とか術前計測とかは行わず、豊富な経験と目分量で矯正していくといった感じでした。イリザロフを装着した患者さんは術後数日で退院し、その後の消毒も延長も患者さん本人が行ないます。

退院後の診察は月に一回行ない、下肢全長のレントゲンを撮影し、それをもとに矯正方向と延長のスピードの指示のみ行ないます。

イタリア人は大らかです。イリザロフを装着してから入浴してもいいのかと教授に質問したら、イリザロフを装着したまま海水浴している患者さんの写真を見せてくれて、これでも大丈夫だとの返事が帰ってきました。イリザロフの抜去も大胆です。不潔のニッパーでワイヤーをカットしてアルコールのスプレーをかけただけで抜去し、次の患者さんにも同じニッパーで抜去します。こんな大らかなイ

タリア人の性格があるからこそ、イリザロフの受け入れも良いのだと思いました。

症例は外傷や感染性偽関節が多かったのですが、先天性の変形などの症例も見ることが出来て大変勉強になりました（時々、美容整形での下肢延長もやってみました）。この貴重な経験を生かして今後は大学病院でもイリザロフ法を取り入れた治療をしていきたいと考えております。

最後にイタリアでの研修の機会を与えてくださった大塚隆信教授と教室の皆様に深く感謝致します。

